

---

書 評

---

Brian Stock

*After Augustine ; The Meditative Reader and the Text*

University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2001, pp. 132

荻野弘之

古代後期から中世の全般にわたり、自己啓発と結びついた「靈的な修養」は、集中的な読書と瞑想とによって遂行された。こうした理念の確立にあたって、またその具体的な実践の両面で、アウグスティヌスが圧倒的な影響を与えたことは言うまでもない。本書はアウグスティヌスと後代の作家たちとを比較しながら、その軌跡を辿った論考である。

全体は比較的短い七つの章からなる。(1) 読書と自己認識、(2) 倫理的価値と文学的想像力、(3) 古代後期の文学的リアリズム、(4) 自己表現の問題、(5) ペトルカのアウグスティヌス像、(6) 二つのユートピア、(7) 靈的読書。いずれも1994-2000年にかけて *New Literary History* 誌に掲載された論稿(1)(5)(2)と米仏伊の大学での講演録(4)(3)(6)(7)を下地に、全体にゆるい統一をもたせたが、この章立てに即して、古代後期から中世を経てルネサンス・近世へと至る歴史的展開を考察する。

その意味で、本書は一貫して「読者」としての視点からアウグスティヌスを読み直した画期的な研究 *Augustine the Reader; Meditation, Self-Knowledge, and the Ethics of Interpretation*, Harvard U. P. 1996 (本誌39号に林明弘氏の書評がある)と、11-12世紀における(アンセルムス、アベラール、ベルナルらにおける)書物論・読書論を扱った大著 *Implications of Literacy; Written Language and Models*

*of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Princeton U. P. 1983 との中間を埋める作業でもあり、主題と方法の点では *Listening for the Text; On the Uses of the Past*, Johns Hopkins U. P. 1990 及び *La Connaissance de soi au Moyen Age*, Collège de France, 1998 と重なる内容をもっている。

さて中世とルネサンスの思想家たちは、概してアウグスティヌスの読書＝解釈論を体系的な教説として受容する傾向が強いが、アウグスティヌス自身は、サン・ヴィクトルのフーゴー『ディダスカリコン』のような教科書的な学習論を詳述したわけではない。それはむしろ意図的な不作為であり、自分の発言が型にはまった教説として受取られることを躊躇したためだった、と著者は推測する。だがそれゆえに、ランフランクス (ca. 1010-89) とベレンガリウス (ca. 1055-88) の聖餐論争のように、聖書解釈の原理をめぐる、対立する陣営から時に恣意的な仕方でも権威として引用される結果にもなったのである。

本を読む行為、書かれた言葉にふれ、その意味に思いをめぐらし、友人と語り合うことの体験は、アウグスティヌスにとって比類なき重要性をもっている。彼の関心は広義の言語哲学、記号論と解釈学として出発したが（『教師論』、『キリスト教の教え』を機に哲学から聖書研究へと歩みを進める中で、その関心は音声言語よりは文字言語固有の問題へと向かっていく。「読者」の概念は、こうして書かれた記号の解読と、またプロティノスの影響下で、読書が惹起する観想と結びつき、読書と思索は相互に切離し難い活動となるのである。

回心後、数多くの聖書講解や神学著作ではテキスト読解の模範を実演し、また「自伝」（この概念については p.8-13 で検討される）の中ではさまざまな読書を経験する自画像を描いてみせる。『告白』とは第1巻における言語習得の訓練と少年時代のウェルギリウス愛読から始まり、第3-7巻では、マニ教を含む古代哲学諸派のテキストを貪欲に蚕食しながら、一方で聖書の読解が深化する様子が対位的に語られる。そしてアンブロシウス、プロティノス、マリウス＝ウィクトリヌス、アントニウス、パウロらを媒介に神の言葉が切迫するほどに、内面の分裂は深刻の度を増していく。第8-9巻では、家族や友人と聖書を共に読むことを通じて、言葉を超えた完璧な相互理解（オスティア体験）が描かれる。かくして彼はその自伝にある種の「言語の不在」から始め、別種の「言語の不在」で締めくくっているとも言えるのである（序章）。

アウグスティヌスの自伝は「自己発見をめざす内面への旅」とも要約できようか。それは、読書と思索を幾重にも織り重ねることで進んでゆくが、同時に読者に対しておのずと探究の方法を示すことになる。つまり『告白』を精読し、そこから惹起される自己吟味を通じて、読者はまさにアウグスティヌスと同じ道を歩む（または歩ませられる）のである。ウェルギリウスの「漂流」のイマージュは「放蕩息子の帰宅」と並んで彼が自分の境涯を語るのにしばしば用いている。それは新プラトン主義の「流出と帰還」の隠喩でもある（第1章）。

倫理はしばしば、哲学の問題であると同時に文学の課題でもあった。プラトン『国家』の「詩人追放論」はこの対立を宿命と見ているのだが、キリスト教の文脈にあっても、古代の（異教的）文芸や教養をどのように活かせるかは大きな課題であり、その対処の仕方は必ずしも一様ではない（第2章）。

広義の「自伝」は実は中世においてかなり書かれたのだが、その際、作品のうちに著者が自己をいかに表象するかは大きな問題であった。著者はペトラルカ『わが秘密』を題材に、ルネサンス以降の「対話文学」を検討する。『わが秘密』には中世の修道僧の姿をしたアウグスティヌスが登場する。人妻との不倫に縛られ、世俗歌謡（Canzoniere）の成功で名声を得たペトラルカ自身の世俗的な希望を代弁するフランチェスコに対して、アウグスティヌスは厳しく叱責するが、両者の対話はどちらにとっても満足のいく結末では終わらない。この対話は「真理の女神」の前で行なわれる。著者はこれを理想化された『わが秘密』の読者と考える。つまり二人の対話を通じて、異なる倫理的な立場を吟味し、両者が調停可能であるかを最終的に判断することは、読者へと投げ渡されているのである（第5章）。

20世紀は社会主義という理想国家建設の実験と蹉跎の世紀でもあった。「歴史の終焉」が喧伝される中でアウグスティヌス『神の国』は硬直した歴史神学とは違った視点から読み直される価値をもつだろう。著者はユートピア文学の系譜を意識しつつ、トマス・モア『ユートピア』との比較を試みる。プラトンの理想国とは違って、両者はあくまで現実の社会状況の中で理想郷の問題を考察しようとした点で共通するが、読者あるいは読書の意味が決定的に異なると著者は診断する。アウグスティヌスの場合、読者はこの世を超えて来世へと準備すべく禁欲的な修養へと招かれる。モアの場合、読書は公共の富へと接近可能にする手段であり、その意味で個人の知的な進歩以上に社会全体の進歩のための道具なのである（第6章）。

本書を通じて著者が常に意識しているのは、繰返し引用されるクルチウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』である。そしてクルチウスの文学史研究が大戦後の欧州人の危機意識を背景に生まれたように、ストックの本書にもほんのりとではあるが「西欧」の文化に対する同一性の模索とでもいった動機が窺われる。それは古典語の教養が急速に衰退しつつある現状が背景にあろう。11世紀以来修道院神学の著作家の間で、読書 (lectio) 瞑想 (meditatio) 祈り (oratio) に聖務を三分する伝統が確立した。しかし lectio divina はそのうちに思索や問いの契機を含まないために、13世紀以降 lectio spiritualis へと再編されることになる。クルチウスの世代に較べ、今や神学や哲学は「体系的な思考」という呪縛を脱している。すぐれた神学が体系的(スコラ的?)である必要もないし、事実なかったのである。著者は神学と文学(詩)の対立を超えて「霊的な読書」という理念のもとに、現代における新たなアウグスティヌスの伝統の復興を探ろうとしているように見える(第7章)。

わが国では野家啓一『物語の哲学』(岩波現代文庫 2005)が柳田民俗学を鏡に口承伝承の復権を説いた斬新な試みであるが、書かれた文字と読書による自己吟味、さらに倫理の形成という点では、なお哲学・神学・文学にまたがるこうした問題を跡づける研究を目にすることは稀少(あるいは皆無?)であろう。その意味で、本書は小著ながら、中世思想に携わるわが国の研究者にとって有益な示唆に富むと思う。また本書は、古代末期から19世紀に至る文学・思想史を縦覧する広範な引用を含んでいながら、単なる凡庸な博識に終わらず、問題そのものに読者を誘う馥郁たる香りに充ちている。

著者はトロント大学(歴史と比較文学)教授。米国生まれながら、学風はむしろフランス風の文学史研究の延長上にある。他方で M. マクルーハンや N. フライなどメディア論や文芸批評を育んだカナダ・トロントの伝統を背景にもち、米仏伊にまたがる研究活動を繰広げている。カリフォルニア大学セイザー記念連続講演(初期アウグスティヌス研究)の公刊(University of California Press)も予告されている。